現場ルポ

中小規模事業場労働安全衛生評価事業の登録第１号に聞く

㈱開工業所

㈱開（ひらき）工業所（山口県下関市）は「金型・工具」部門、産業機械の設計から製造、据え付けまでを行う「造機」部門、各種管材の二次加工を行う「管材」部門の３つの部門を中核とした生産用機械器具メーカーで、製品は新幹線の車体や国産スポーツカーなどに採用されており、従業員は約100人である。1948年に設立され、その高度な技術力から2008年に経済産業省中小企業庁の「元気なモノづくり中小企業300社」に選定されている。

同社は2013年に、中災防が実施している「中小規模事業場労働安全衛生評価事業（愛称：JISHAグッド・セーフティ・カンパニー、略称：GSC）の日本で最初の登録事業場となった。そして今回、初回評価の有効期間３年間を満了し、２回目以降の登録更新に必要となるチャレンジ評価を受け、今年６月に「登録更新第１号」の事業場となった（**写真１**）。

写真１　登録更新第１号の認定証授与式の様子

GSCの登録・登録更新にあたって

開工業所の開憲二代表取締役（以下、開社長）に今回のチャレンジ評価に当たってどのような苦労があったかを聞いたところ、「苦労は何もない。更新に当たって特別なことは何もしていない」という答えが返ってきた。ただ、この言葉の陰には、「過去に経験した痛い思いや苦い思い」を背景として安全衛生活動が進められ、現在では「安全衛生活動に費やす時間を無駄だと思う社員が誰一人いない」というところにまですでに醸成された職場風土があるのだろう。

しかし、今回のチャレンジ評価を受けた結果、内容が非常にレベルアップしていると感じたようだ。「チャレンジ評価の項目を見て、安全衛生グループの課長は度肝を抜かれていた」と表現するのは、同社の橋本啓司・取締役総務部長である。

日ごろ取り組んでいる活動ではあるが、「この中身を全部やっていたら、とても人手が足りない」「これだけやれる企業だったら、もはや中小企業ではない」と思うほど、具体的で細分化された内容になっており、「安全グループは性根を据えて行動を進めた。それが本音」という。

同社では既にさらに次の更新となる2回目のチャレンジ評価となる3年後を見据えて活動している。「次回の更新時は評価のレベルがさらに上がると想定し、現場の課長と係長がプランニングをしている」という。「最終的には、「ここまでしなくても良かった」ということはあるかもしれないが、それがマイナス側に振れることは一切ない。だからやりすぎるくらいでもよいのではないか」とは、開社長の弁である。

新入社員からトップまで ～体感のある職場風土

新入社員研修で提出されるリポートは、「新入社員が記入」→「指導者がコメント」→「所属長がコメント」→「担当部長がコメント」→「安全衛生グループ課長がコメント」→「社長がコメント」の順で回付される。そして、社長がコメントを記入した後は逆ルートで新入社員に返却され、本人が原本を保管し、写しを直属の上司が職場で保管している。

つまり、上司が部下に対するコメントをすべて見られると同時に、部下も上司のコメントをすべて見られる。この仕組みで新入社員は研修で何を学び、何を考え、上司はどのように思っていたかを振り返ることができるので、業務のレベルアップにもつながっていく。さらに、このリポートは、翌年の新入社員に「今は立派なあの先輩も、最初はこんな苦労をしていた」と紹介することで、彼らのプレッシャーを和らげることにもつながっているようである。

以前は、事故を起こさないで1人で作業ができるかを測る「作業習熟度チェック」というリポートがあったが、提出が滞りがちだったという。しかし、「安全に対する目に見えない、日々の積み重ねによって、各社員が「なぜこれを出さないといけないか」を考えてくれるようになったので、現在実施のリポートはしっかり提出されている」と、前出の橋本部長はいう。この進歩は、記入者が記したリポートを見れば一目瞭然である。

また、このリポートでは、社長自らがたとえ1、2行でもコメントを記入している。開社長は「このリポートでは失敗を責めない」と言う。さらに「社員が一生懸命書いたものに対してアドバイスをすることは、本人を育てるということもあるが、組織的な活動をしようと思ったら、それくらいの時間は大した問題ではない」との思いが込められている。

開社長をはじめとする経営陣には、安全について「一部の人が頑張っているだけでは99%達成できない。一般職全員が主役にならない限り、企業の安全は保てない」という考えがある。そして、この考えを「社員それぞれが理解していると考えている」という。ここに、開工業所の安全衛生活動のレベルの高さ、推進力の強さがあるのだろう（**写真2**、64頁）。

開工業所の目指すもの ～開社長の思い

開社長は、「企業活動をするのであれば、高品質、短納期はすべての企業で言われること。しかし、安全に関して、例えば「中国四国地方にある中小企業では

写真２　開工業所の外観

写真３　建屋はワンフロア

開工業がダントツに進んだ活動をしているから見に行ってはどうか」と、言われるまでにもっていけたら、私にとって勲章になると思います。そのときには、「ケガが出ないということ＝高生産」になっているはずです」と言う。

さて、開工業所の建屋はワンフロアで社長室がない（**写真３**）。他社とは違い、よい意味で「社長に対してピリピリ感がない」という。ワンフロアなので、例えば電話の応対後の社員の表情から、「何か困ったことがあったようだな」などということが分かるので、すぐに声をかけることができるという。先代は社長席のある一画をパーティションで仕切っていたというが、それを外した理由を開社長に聞くと、「社員から「社長は仕事をしていないんじゃないか」と思われるのが嫌だから」と笑って答えてくれたが、それは建前で、実際には風通しの良い職場の空気を遮（さえぎ）りたくないからだろう。

最近、開社長は通信教育でガーデニングを始めた。植物を育てていくうちに、「ガーデニングは安全と一緒やな」と思うようになったという。植物はただ植えれば育つというわけではなく、「良い土づくり」が大切であり、それが基本である。安全も「取り組む人々＝社員みんなの高い意識」が根底になければ続いていかない。開社長の「基本がないところにただ植えても、瞬間はきれいだがすぐにだめになる」という言葉は、安全に日々取り組んでいる経験が言わせるものであろう。また、「植物が育つということは、花が咲くということ。安全も同じで、KY やリスクアセスメントなど、やらなければいけないことがいっぱいある。植物の場合、花のつぼみがいっぱいあって、それが１つずつ咲くことで、一つの目的が達成されたということ。これは安全にもたとえられて、「安全活動を１つやればいい」ということではなく、いろいろやること（つぼみ）があって、その１つひとつがうまくいって目的が達成されて、いつか満開を迎えるんだろうなと思う。だから、なんとなく安全とガーデニングって一緒やなって…」。

開社長、ガーデニングはあと少しで通信教育修了認定がいただけるそうである。

「ご安全に！」

〈中小規模事業場労働安全衛生評価事業（GSC）の問い合わせ先〉
中災防　技術支援部
マネジメントシステム推進センター
TEL03-3452-6404　中災防　GSC　で検索